

島田正治

わたしは昨年十二月十七日が誕生日で、満七十四歳となった。生まれは京都市中京区、町のどまん中である。十二月になると急に寒くなる。幼い頃といっても小学校二、三年になってからと思うが、よく弟を連れて誕生日には氏子の東山四条の八坂神社、俗に祇園さんへお詣りに行った。四条通りに、ちょっとしたゲーム屋があって、その入口に近いところに、一銭か二銭入れると起重機のようなものが作動して、箱の下に置いてある飴やチョコレート、箱入りキャラメルなどをシャベルですくいあげようというものだが、これがなかなか成功しない。欲ばって大きいものをねらうと持ち上げてこちらへ運ぼうとする前に落ちてしまい、がっかりする。これは一、二回でやめてしまった。

誕生日がきまって寒い十二月なので、わが家では毎年すき焼をすることになっていた。祇園さんへお参りしたあと、錦小路通りのマーケット街で牛肉を買ってくるようにたのまれていた。それはよかったが、錦のすぐ横が京極、映画や芝居などの歓楽街で軒を並べている。肉を買ったあと、あたりはまだ明るいから二人で映画を鑑ようと
いうことになって中へはいった。その折り見た映画はなんだったかまるっきり覚えていない。早く帰らなければいけないと気になりながらも、映画を最後まで見て、さて外へ出たらあたりはまっ暗、慌てた二人は、買った牛肉をかかえ、駆け足で家へ向った。家へ戻ると、すき焼の用意はみな揃っていて、足りないのは牛肉だけだった。両親も二人がどこで何をして、こんなに遅くなったのかを咎めることもなく叱られもしないで無事済んだ。

日本では新老人だの、老人力など、特に高齢者が話題になる。さしずめわたしなどもその中に入ってしまった。その老人むけの雑誌が多く売れているらしい。"いつも健やか" "若さいつまでも" "生きいき" とくる。決して以前のように若くない。髪の毛も白くなった。行動力もにぶくなる。そんなわたしに、逆に若いときとちがって、年をとってできることがある。七十余年、この世に生を受け今日まで生きてきた。短いようで長くもあった。生あるものいつかは死すが、できたら長生きしたいと思う。諸先輩の八十代、九十代の人から言わせればまだ青二才同然といってよい。えらそうなことを言うな、と自分に言いきかせる。

熊谷守一は最晩年九十歳の書に「無理はせぬこと」とある。もっとあとはこの書の"こと"を取った。あまり説教がましい。自分のこととしてとらえようとした。

若さは生氣あふれる。そのエネルギーで勝負できる。老いはその逆となる。一方でその研ぎすまされた、かくれた力が潜在する。あまりがんばろうとしなくてもよい。自然にまかせる。

生死は何人といえど一瞬先はわからぬ。明日になるか、一年先になるか、あるいは十年、二十年か、早かれ遅かれやってくることにはまちがいない。これも百歳越えたら万万歳だ。かつて清水寺の管長だった大西良慶が話している。たしか百何歳まで生きられた。その老師が「何も難しい理屈などあらへん。よく食べ、よく働き、よく眠る。」と。健康法を説いたものに、これ以上のものはない。できたらわたしメキシコ流で言わせてもらおうと、その筆頭に、まず"眠ること"をあげたい。十分、睡眠とると、すべてが解決する。かかった病気もきっとよくなる。(つづく)